

日中戦争における文化侵略(1)

神 戸 輝 夫*

【要 旨】 日中戦争に関する軍事、政治、経済的研究は日本、中国双方において研究成果が積み重ねられて来ている。しかし日本の文化的侵略に関する研究はまだ十分に明らかにされていない。本研究は浙江省、江蘇省における文化侵略の実態について現地調査を含めて明らかにしようとするものである。本稿では浙江省の南潯における文化侵略、特に個人図書館である嘉業堂蔵書楼に対する略奪について述べる。

【キーワード】 日中戦争 文化侵略 南潯 劉承幹 嘉業堂蔵書楼

はじめに

1998年秋、私は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科のKurt.W.Radtke教授から一つの論文を送られた。それは復旦大学教授楽敏氏の「述論侵華日軍在浙江地区的文化劫掠(1937-1945)」(初稿1998年10月)であった。この論文はその題名が示しているように、日中戦争期間における日本軍の浙江省における文化略奪について『浙江省図書館志』¹⁾『鉄証』²⁾「浙江省図書館檔案」「浙江檔案館檔案」などを用いて明らかにしているものであった。

この論文の構成は次の通りである。

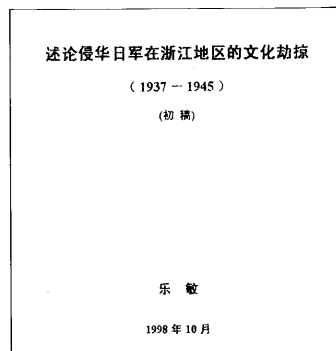
前言

- 一、日軍对浙江地区的武力侵犯
- 二、日軍对圖書的損毀
- 三、日軍对文物的劫奪
- 四、日軍对教育事業的破壞
- 五、日軍对新聞出版事業的破壞
- 六、日軍文化劫掠对浙江的影響
- 七、逆境創新篇

結語

参考文献

私は、この論文を一読し、楽敏教授が「前言」で述べる(後述)ように、日中戦争中における日本帝国主義の「文化侵略」に対する研究が遅れていることを痛感し、これを機に同研究を



平成12年5月8日受理

*かんべ てるお 大分大学教育福祉科学部歴史学教室

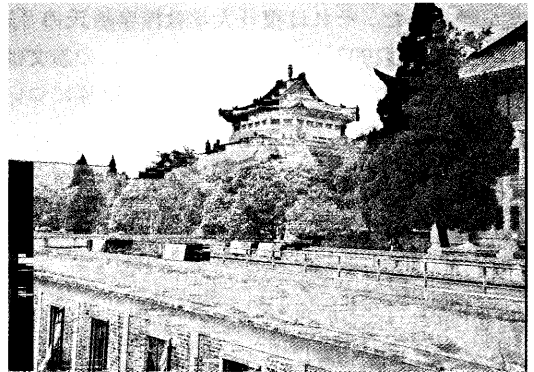
進める必要があると考えた。私はかねがね日中友好運動の発展を願い、その運動にも参加しているが、最近日中戦争において日本が行った様々な罪行に対する反省が薄れつつあるのではないかと危惧しているからである。

大分県においても大分市、別府市を始め幾つかの市町村が中国の諸都市と友好都市の締結を行っているが、友好交流を進めるに当たっては、日本が過去に中国において行った罪行に対する反省が前提とされねばならないと考えている。

例えば大分市は武漢市と友好都市の締結を行い、昨1999年友好都市締結20周年の記念式典を盛大に催した。しかし一方で、日本軍の武漢における文化侵略について、農偉雄氏等は「1938年末に日本の憲兵が武漢大学図書館を占領した後、該図書館が漢口の特二区の貨物列車に避難させていた600箱の図書を20台のトラックで奪い去り、最後には日本に運んだ。その略奪された書籍は6万冊に上る」と報告している。³⁾

また王聿均氏は「民国27年（1938）10月25日、武漢は陥落した。日本軍は珞珈山の武漢大学の本部を占領し、その結果器具、服装、舟車、家畜、機械儀器、土地、建物の全損失は、68余万元に達する」と指摘する。同氏は更に言葉を続けて、武漢大学が武漢を離れ宜昌、四川万県、楽山の文廟に次々と疎開した後も、大学は日本軍の爆撃により甚大な被害を出し「武漢大学の疎開の過程は、実に多くの災難の連続であった」と痛恨の言を発している。⁴⁾

武漢大学に対するこのような略奪の事実は、これまで明らかにされてこなかったし、大分市の発行した武漢市との友好を記念する冊子等にも、日本軍による罪行を記載し、そのことを反省した文章は見られない。一方、武漢市の『武漢市志・軍事志』⁵⁾には、1938年10月末、日本軍が武漢を占領した後、「11月中旬以後、漢口を占領した第11軍第6師団は続々と武昌に向かって進攻し、汀泗橋以北の粵漢線及び武昌の東、南の要路を“警備”し、その司令部を武昌の珞珈山に置いた」と記す。武漢大学はまさに珞珈山の下に位置しているのである。私は、1999年3月武漢大学歴史系を訪問し副学部長で近代史研究家の李少軍教授、馮天瑜教授、覃啓助副教授等と歓談した。その後、私は武漢大学の構内を案内され、日本軍が武漢占領時期に司令部として使用した校舎を見た。彼らはその事について深くは話さなかったが、日本の侵略の証拠は歴然として残っているのである。



武漢大学の旧校舎

更に武漢市における日本軍の文化破壊について述べれば、『近代武漢城市史』⁶⁾は「漢口の中山公園は武漢三鎮の歴史ある公園の一つである。1938年10月、日本軍の松田兵団は中山公園を占領し、兵団の駐屯地とし、公園の建築物と樹木花園を完全に破壊した」と記す。この他にも同書は、1924年武昌に作られた首義公園と中山記念堂の破壊、1930年漢口特別市政府前に作られた西洋式花園の兵営と厩舎としての使用、1913年建設の湖上園と1917年建設の武昌の琴園の建築物の全壊を挙げている。

また大分県国東町の町立歴史民俗資料館は、1999年から浙江省博物館（杭州市）と提携交流している。これは同町に弥生時代の米作状況をよく残している安国寺遺跡があることによるも

ので、2001年4月には安国寺集落史跡公園と体験学習館がオープンすると聞いている。一方浙江省余姚市には同じく中国最古の米作遺跡として名高い河姆渡遺跡と河姆渡博物館があり、浙江省博物館にも河姆渡遺跡の主要発掘品を展示している。両館は共に代表的な米作遺跡を持ち、その関連資料を展示していることが機縁となって提携交流を行うようになったものである。しかし、楽敏教授が明らかにしているように、日中戦争中に日本は浙江省博物館所蔵の大量の文物を略奪、破壊しているのである。

この点について楽敏論文に次の指摘がある。

戦争が上海、杭州に波及して来たので、博物館では急いで図書資料、儀器、工具と貴重な標本及び文物を箱に詰めて外に運び出した。日常の仕事は完全に停頓してしまった。豊富な所蔵品はただ木箱に入れただけで、富陽、蘭溪、永康、麗水、松陽などを転々とし、仕事をすることもできなかつた。ようやく1943年7月龍泉の臨時宿舍に運びこみ、陳列、採集、研究、製作を始めることが可能となった。博物館の財産は戦争期間中に多くの損失を受けた。1945年11月接収されていた杭州の博物館に帰還したとき、博物館所蔵品が日本の略奪を何度も受けたことが分かった。自然科学部のものは大体旧状のまま保留されていたが、歴史文化部の損失は多大に上っていた。戦前館内の蔵品は6万余件あったが、戦後の整理と再収集によると3万余件に過ぎなかつた。そのうち歴史文化部のものは9000余件、自然科学部の動物標本は13000余件、植物標本は10000余件、地質・鉱物標本は千余件、儀器30余件で、戦前からの遺留品はその中の4分の3であつた。事前に余杭に疎開させ林牧公司に隠した貴重な標本は、その一部分が日本の飛行機による爆撃で焼却された。その中には植物標本が3万余種、芸術作品が500余件あつた。1939年11月21日、清朝の古文文献412件が傀儡政權によって略奪された。戦後、作業を再開した時に、文物の不足に悩まされ、また博物館が数年間に蓄積して出版した各種の読み物も大半が散失しており、教育普及の仕事に従事する上で多くの不便を被つた。⁷⁾

私は、大分市と武漢市の友好都市締結や国東町立歴史民俗資料館と浙江省博物館の提携交流を喜ぶ者であるが、同時に、果たして上に明らかにされているような、かつて日中戦争に日本が武漢大学図書館の蔵書や浙江省博物館の文物に対して行つた略奪と破壊の歴史について、どれだけの人が知っているのか危惧している。私たちは過去の歴史事実を直視した上で友好の絆を固くすべきではなからうか。

楽敏教授も指摘するように、最近日中戦争において生じた戦争責任を否定しようとする動向が表面化している。これらの動きに対する反撃は、歴史的事実を丹念に明らかにしていくことであろう。楽敏教授の論文に触発されて、私は中国における文化侵略について少しずつ資料を収集するとともに、その実態について調査研究を始めた。

私は、その成果の一端を、1999年7月18日、大分県文化財保存協議会主催の公開講演会において「日中戦争と文化侵略」として報告した。⁸⁾ その直後、私の講演を聞かれた「梅園研究会」の浜松昭次朗氏から嚴紹瀟著『漢籍在日本の流布研究』⁹⁾をいただいた。この著書の第5章は「二戦期間日本軍国主義对中国文献典籍的劫奪」であり、日中戦争中における日中の図書を中心とした文化侵略について触れている。このような協力を得て資料収集も少しずつ前進した。また私自身も資料収集の一つとして、1999年4月と同11月に浙江省湖州市南潯鎮において日本軍の文化侵略に関する簡単な調査を行った。

本研究はそのような調査と研究の第一報である。¹⁰⁾

I. 文化侵略とは

文化侵略の概念を明らかにするために、最初に楽敏論文の「前言」を次に紹介する。

抗日戦争史の研究の中で、日本の中国侵略研究は主要な課題の一つであり、その研究は既に早い時期から行われていた。半世紀の蓄積を経て資料の編纂や論著の執筆においても豊富な成果を得ているのは勿論、視点も次々に更新されている。特に最近では、国内の学界は日本の中国に対する侵略政策、侵略活動、侵略戦略方針、侵略の人物、日本軍の罪惡暴行などの研究について多くの進展を見ている。但その内容の多くは軍事、経済、政治面の侵略と中国人民の人身に対する侵害暴行に重点を置いており、日本軍国主義が中国文化事業に対して侵した暴行については、まだ僅かばかりの資料編集があるのと少数の論著が言及しているに過ぎない。

これまで幾つかの論著は全て日本軍の浙江における文化略奪について論及しているが、地域的、期間的範囲が広大であり、資料も分散しているため、今まで各地の損失に対して詳細な調査を行うという成果は出されていない。筆者は日本の侵略者が浙江地区において行った文化侵略と暴行について調査と整理を行い、この事について幾分かの探索を企図している。

日本帝国主義の中国侵略の目的は、ただ単に政治的、地理的、軍事的概念上から当時の中国を滅亡させることにあっただけでなく、文化的にも中国を滅亡させることにあつたのである。日本が中国侵略戦争中に中国の文化侵略と中国の文化事業に対して侵した暴行は、極めて残酷であり人を驚かせるものである。その内容は性質的にその他の罪行と同様に悪劣であるだけでなく、後への結果および影響という点では、その他の罪行と比べても見過ごすことのできないものである。日本帝国主義のこのような罪行とそれが中国に与えた巨大な破壊と損失に対して広く事実を調査することは、歴史研究者の当然の責任である。

更に現実的な意義について触れるならば、80年代以来、日本政府が侵略戦争を美化し、日本の戦争責任を否定しようとする動きがしばしば発生していることである。本課題の研究は、日本帝国主義が中国侵略戦争において犯した罪行や暴行に対して一層深く暴露と批判を行うことに有効である。またそのことは日本の政界の中における右翼分子の行為に対して一つの有力な打撃を与えるだけでなく、また中日両国人民の正確な歴史を待ち望んでいる者に新しい史料と視角を提供し、中日両国関係のより良い発展にとって役立つものとなる。

この「前言」の中で楽敏教授は、「文化劫掠」の内容として、日本の中国に対する「文化侵略と文化事業」に対する罪行を挙げている。具体的には論文の中で展開されているように、図書館に対する損毀、文物の略奪、教育事業に対する破壊、教育出版事業に対する破壊などを含んでいる。

また王聿均氏の論文「戦時日軍对中国文化的破壊」¹⁰⁾は、その「前言」において日本軍による中国の文化破壊について次のようにまとめている。

中日戦争期間、中国にいた日本軍は計画的に中国の教育、文化と学術機関を破壊した。包括的にいえば、著名な大学に対しては爆撃、中・小学校に対しては破壊、書店・博物館・図書館と江浙沿線の大建築物に対しては焚燬、公私の書籍・古物の収集品に対しては略奪、文化人と学者に対しては殺害等を行ったことは枚挙にいとまがない。これらの破壊行為は、戦地あるい

は戦地付近に限らず、また後方の各省にも及んでいた。その人道と国際公法を顧みない状態は、いかなる交戦国の間においても見ることでないものであった。その目的は中国文化の徹底した消滅を意図しただけでなく、大陸を征服するという馬鹿げた夢を追い求めることにあった。またこれによって中国の知識人を屈服させ、その心霊と精神を碎き、その愛国心と昂揚する救国意識を圧迫しようと願ったのである。これらの暴行によって、中国の文物に対して成された損失は大きなものがあつたが、日本軍の目的は達せられず、いつも反発を食らった。更に中国人の敵愾心と決心を激発した。本文は歴史的事実に基づき、戦時の日本軍の中国文化破壊の具体的状況をそれぞれ論述しようとしたものである。

以上楽敏教授、王聿氏の述べるところをまとめると、日本の中国に対する文化侵略とは、公私図書館からの図書の略奪破壊と同施設の破壊、博物館からの文物の略奪破壊と同施設の破壊、個人の所有する書画・骨董など文物の略奪破壊、教育事業に対する破壊、小学校から大学までに至る教育施設の破壊、書店・出版社・新聞社などに対する略奪と同施設の破壊、寺廟・名勝旧跡など史跡文物の略奪破壊、文化人や学者に対する殺害等を含む広い概念を示すものである。

本論文で扱う「文化侵略」は、この概念を使用するとともに、更には中国の思想、教育、芸術、社会生活等の場における反共産主義、反抗日、「大東亜新秩序建設」のためになされた全ての活動をも含む概念である。

Ⅱ. 南潯鎮における調査（その一）

南潯史館

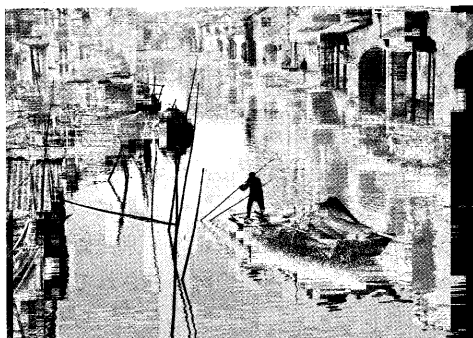
浙江省湖州市の南潯鎮の調査を1999年4月16日と同11月21日の二度にわたって行った。

南潯鎮は杭州、蘇州、上海のいずれからも約100キロメートルの距離にある。明清以来、南潯鎮は蚕絲生産と絹織物業の中心地として「江浙の雄鎮」と謳われたところである。特に「輯里の湖絲」は、南潯の特産として内外に広く知られた。現在は江浙周辺の数十郷鎮の商業取引の中心地となっている。歴史的、文化的にも省レベルの文化財が多く、中でも劉承幹の「嘉業堂藏書樓」および劉承幹の祖父で清代光祿大夫



南潯史館

劉鏞の造営にかかる花園と旧宅「小蓮荘」、南潯「四象」の一人張頌賢の孫張鈞衡が清末に建てた中西折衷の住居「張石銘旧宅」、民国の元老張靜江の旧宅「張靜江故居」、明清時代の建築群である「百間樓」などが保護さ



運河に面した百間樓

れている。また鎮内を流れる何本もの水路に明清時代の建築にかかる石橋も多く、これらも文化財としての価値をもっている。

最初に調査したのは南西街にある南潯史館である。この建物は元商業会館で、清代嘉慶末年（1820）の重建にかかる広恵橋¹²⁾の前に位置し、現在は史館と同時に南潯鎮政府の建物としても使用されている。南潯史館の展示物は近現代史が中心であるが、その中に「日軍在潯的暴行」（日本軍の南潯における暴行）と章芷園・孫増福の調査による「日本侵略軍焚毀房屋調査表」（日本侵略軍による家屋の焼き払いと破壊に関する調査表）のパネルが掲げられている。

「日軍在潯的暴行」には次のように日本軍の南潯占領時の暴行が告発されている。

《殺人と放火》：1938年1月18日、日本軍は南潯鎮を占領し、市内において縦に住民を屠殺した。占領の初期には市内及びその近郊で被害を受けた者は400余人に達したのみならず、徐軼唐の「南潯調査報告」は、南潯が占領された当日、全鎮の火災は天を衝き十余日燃え続け、全鎮の房屋の損失は八九割に及んだと記載する。（詳しくは章芷園・孫増福「南潯鎮被焚房屋調査表」を見よ）日本が南潯に駐屯した期間、また何人かの憂国の志士、例えば莊開伯（絲業小学校教師）、陳家駒、張荷声などが日本軍に殺害された。

《婦女の姦淫》：占領期間、本鎮及び近郊四郷で日本軍により姦淫され殺害された婦女は百人単位で数えられる。日本と中国傀儡政権は義倉橋の西端に「慰問所」（軍妓院）を設け、中に中国人婦女十数人を置き日本人の享楽に供した。

《清郷》：日本軍は南潯を占領した後、保甲制度を実行し戸口の管理を強化し、「良民証」を使用させた。良民証を持たない者は「支那兵」（中国兵）と見なされ、拘禁されひどいときには殺害された。南潯では四カ所の出入り口に対して取り調べを行い、通行税を取った。東の木柵から外は江蘇省となるので、洗粉兜からバスターミナルまでは電線を架設し竹矢来を巡らせ立ち入り禁止区とした。誤って禁止区に入る者に対しては殺害することも止むなしとした。日本軍は東柵の風水墩を過ぎた場所に南潯の数千の民衆を脅迫して連れてこさせ、指揮刀で中国人を斬り殺す場面を「參觀」させた。

1943年7月敵の傀儡政権は杭州地区で「清郷」を行つた。南潯ではその画定された範囲の中にトーチカを築き「拠点」とした。

《文物の略奪》：住民の回想によれば、1938年春、日本軍の宣撫長は二つの棺桶をかつがせて南潯の富戸龐菜臣の家に行かせ、空っぽで入り、一杯にして出て来て、書画文物を略奪した。また皇甫煌の家でも一箱の書画が日本軍によって略奪された。実際に略奪を受けた文物は数え様も無いほどである。占領期間、南潯の多くの繭業、絲業が日本商人から統制された。当時、日本人商人は経常的に木造ディーゼル船を使って近郊を略奪した。運河では常に蚕繭、食糧、綫麻を満載し、隊を成して上海に向かう船が見られた。

以上、このパネルは、南潯における日本軍の占領統治における実態を告発しているが、そこには「軍慰安所」の設置と中国人婦女の連行のあったことが判明する。また「良民証」の発給と「検問所」の設置は、後に「南京傀儡政府」の「清郷」政策にも継承されるものである。文物の略奪については二家の例が記されているが、この他にも略奪破壊等のあったことは、次の嘉業堂蔵書楼の例を待つまでもなく明らかであろう。

Ⅲ. 南潯鎮占領の実態

日本軍の南潯攻撃と占領の実態については、上述のパネルの記載によって知り得るが、更に別の資料から補っておきたい。

賀聖隊・陳麦青選編『抗戦実録之二：淪陷痛史』¹³⁾（下巻）は、「七、鉄蹄下的杭嘉湖」の中に南潯関係の記録として「南潯浩劫写真」¹⁴⁾と「血泪話南潯」¹⁵⁾の二編を記録している。この中から「血泪話南潯」の証言を次に紹介する。

日本軍が南潯を占領したとき、第一に出された訓令は残敵を搜索することに名を借りて、勝手気ままに暴れまわり、銃剣を閃かせて民衆から略奪したことである。彼らがやった行為は、漢奸やごろつきの第二次から甚だしくは第三、第四次略奪にまで引き継がれた。それぞれの家の器具什物は空っぽになるまで持ち去られ、動かすことのできなかつた竈や大きくて古くなつた貯水缶を除いて残された物は何一つ無かつた。箒や物干し竿までも燃料として持って行かれた。家の中のドアや衝立は、すべて日本軍の指揮の下に取り払われ、厩舎とされたり便所に使われた。

南潯は元々富裕な区域で、ここには近隣にも聞こえた非常に多くの金持ちがおり、日本軍は占領以前に既にしっかりと偵察を済ませており、これに加えて漢奸の横行などがあり、そのために鎮全体で略奪を免れた家は一軒も無かつた。彼らの略奪の目的は、金銀などの貴重品以外に次には名人の書画であつた。著名な龐家は既に略奪されて何も無く、他家の蔵書楼が所蔵する各種の古版珍本も日本軍の戦利品とされ、窓にはめ込んだり壁に掛けられたりしていたものも根こそぎ持ち去られ、彼ら一家の損失を計算すると、百万元以上に上る。

壮丁を捕らえると、別動隊であるか良民であるかに拘わらず、即刻斬決に処し、切られた首は無数で、更には四肢をバラバラにした。現在の南潯は既に彼らの後方となつたので、彼らを主人と仰ぐ者たちは“花姑娘”を徴発しようとした。しかし鎮全体は、少数の貧苦の者を除いて、残りは全て他郷に逃避し、婦女も隠れてしまつていたので発見できなかつた。そこで一時期、街頭では“献花姑娘一名、賞洋一百元”（娘一名を連れてくれば、百元を賞す）という張り紙が現れ、魂を売り渡した漢奸が婦女を騙して献上し媚びた。彼らは信用を失わないために、百元を与えたが、それは北洋鈔票か満州偽票であつて、もし受取を拒否すると、一刀の下に切り捨てるか、一発お見舞いするかしたのである。

彼らが村に踏み込んで花姑娘を捜しに来るとき、幾つかの村は望楼を設置して、日本軍兵士がやって来るのを見ると婦女たちは、豚小屋や牛小屋或いは汚穢な場所に身を隠し、何とか逃れることのできたものも少しはいた。

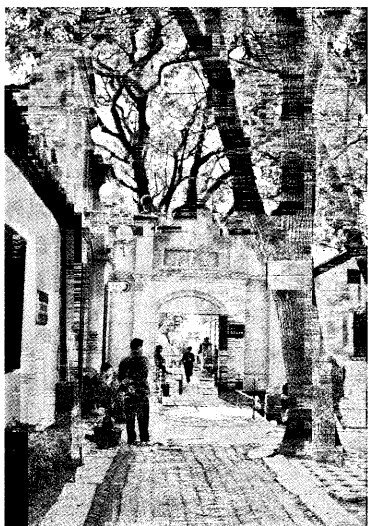
Ⅳ. 南潯鎮における調査（その二）

嘉業堂蔵書楼

南潯史館から南西街を更に南へ約300メートル行き、張石銘旧宅の角を西に折れ鷓鴣溪と名付けられた水路に沿って進むと「小蓮荘」である。小蓮荘は嘉業堂蔵書楼の持ち主劉承幹の邸宅である。小蓮荘の入口を左手に見て、そのまま前進すると蔵書楼大門に行き着く。この門をくぐり右手に50メートル余進むと嘉業堂蔵書楼（以下「蔵書楼」と略）の入り口に達する。蔵

書楼は二階建てで、中庭を囲んで大きな書庫が口の字型に建ち、現在も蔵書の一部が収納されている。楽敏教授はこの蔵書楼に対する日本軍の略奪等については言及していないが、ここの蔵書も日本軍の被害を受けた。

その略奪について触れる前に、まず嘉業堂蔵書楼の蔵書と蔵書楼建設について『嘉業堂蔵書志』¹⁰⁾に付せられた呉格氏の「前言」と付録である劉承幹氏の「嘉業堂蔵書志」「嘉業老人八十自述」によって次に紹介する。



蔵書楼大門

蔵書は30年代より陸續として散逸し始め、劉氏は晩年「概略を追記したいが、この『志』を補完するのは、勢いとして不可能だ」と述べた。50年代後期に至って目録を補完し、幾分か整理を加えたが、なお家に蔵していた。1963年劉氏が逝去した後、『蔵書志』の稿本は家族によって上海の古籍書店に売られた。1981年に至り、この稿本は復旦大学図書館に帰した。復旦大学図書館の古籍蔵書の構成は嘉業堂蔵書との因縁が深い。1953年から1957年に至る間に、王欣夫先生の紹介により復旦大学図書館は前後三回、嘉業堂旧蔵の明・清刻本および鈔本を購入した。

(「前言」)



小蓮荘の入り口

嘉業堂の主人劉承幹(1882-1963)は、字貞一、号翰怡、別号求恕居士。浙江呉興の人。劉氏は若くして富裕で資産に恵まれ、性格は風雅を好み、蔵書と刻書事業に熱心であった。その蔵書は清末に始まり、20年代に極盛であった。たまたま政治的変革に遭遇し、旧家の蔵書は流失し持ち主を変えた。前後20年間に劉氏は30万円を費やし、60万卷、50余万冊の書を集めた。珍本秘籍を網羅し、その規模は殆ど南北公立図書館と相等しく、人は近代私家蔵書の巨人と称している。1923年、浙江湖州南潯鎮に嘉業蔵書楼を落成し、今に至るまで保存は完全である。1920年代前後、劉氏の蔵書は豊富であり、終に『蔵書志』の編纂の挙に着手した。(中略)『蔵書志』は繆氏(荃孫)、呉氏(昌綬)、及び董氏(康)が先後編纂したが、定稿にはならなかった。劉氏はこれを推薦し、なお幾分かの改修を加え、更には自選の解題十余則を増入したが、まだ甚だ簡略であった。嘉業堂の



嘉業堂蔵書楼入り口



嘉業蔵書楼の建物

室は均しく北に向い、齋楼に旧鈔精校の各本多し。室楼は皆宋元槧本なり。再た進んで楼七楹あり。左右繚するに両廡を以てし、廡は各九楹。楼下は嘉業庁事三楹、甲乙兩部に分別す。

(中略) 楼の東西上下は各二楹。書五百余箱を雑置す。左右の廡は各省の郡県志、廡楼は等しく叢書なり。約二百余种。楼より東に室五楹あり。中の三楹は抗昔居、左は編勘の諸君棲息す。右は書を閲す。(中略) 凡そ地は二十四畝を占む。金銭十三万有奇を費やす。庚申孟冬より始め甲子臘尾に終わる。楼の歳費、約三千万金、歴年置く所の田二千五百畝を以て、其の息を取り常費とす。余有らば書籍を添購す。(「嘉業堂蔵書志」)

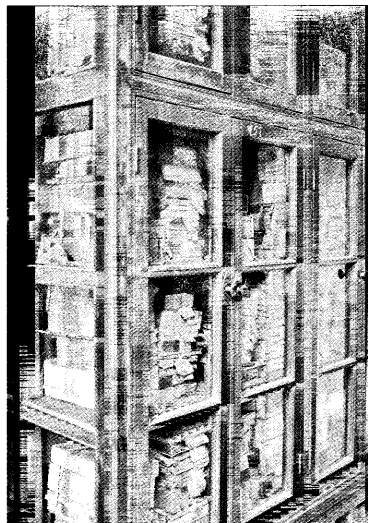
余の志を蔵書に有すは、宣統庚戌に当たる。南洋勸業会を觀んとして金陵に詣る。たまたま書肆を過ぐるに、善本に遇有し、心これを好み、始めて稍々羅致す。辛亥以て還るに、蔵家多く散出し、宋元の佳本、名人の精鈔批校の本乏しからず。重金を惜しまず購入す。十数年間、積もりて五十万冊に至る。獲るところ既に富む。遂に叢書を輯刊するの願いを発し、孤本と罕伝の本を採ひ、次第に授梓し、叢書数種を成す。前哲の遺編を網羅し、『嘉業堂叢書』と曰う。近儒の述作を彙集し『求恕齋叢書』と曰う。郷賢の著わす所を限り、『興興叢書』と曰う。

(中略) 梓郷に嘉業書楼を建つは、実に平生精力の萃むる所なり。楼は家宅を距ること半里ばかり、地三十余畝をはかり、楼は二十四畝を占む。隙地十余畝を留め、四時花木を雑蒔す。並びに池を鑿し魚を養い蓮を種す。楼中の一切の器物は、ただ堅実を取り、華美を求めず。然るに費やす所はすでに八十万金。(中略) 丙子夏五月、余大連の行を作し、王君九学部の家に寓し、日本人松奇鶴雄(号柔甫)に遇う。王任秋太史の門生にして詩文兼ねて擅にす。彼此かつて往還酬酢す。其の明年丁丑、戦端突起す。彼の邦派遣の軍司令松井は、松奇の戚なり。松奇は松井に函し、湖州の友人劉某の蔵書楼あり、保護を加えるべしと謂う。松井此れを以て杭嘉湖司令牧次郎に達し、よく其の言の如くし、絶えて損得せず、且つ楼に入り御賜の匾額及び先人の遺像を見て、均しく礼を行い敬を致す。其の後彼の邦敗退し、所謂遊撃隊長陳万の軍もまた我が宅に居すこと年余、然るに書楼もまた毀損せず、蔵書幸いに恙無きを得たり。(「自述」)

V. 嘉業堂蔵書楼の略奪

嘉業堂蔵書楼の蔵書に対する略奪はなかったのか。まず南潯調査の折りに手に入れた李性忠著『劉承幹与嘉業堂』¹⁷⁾の次の記載を紹介する。

30年代の中後期、劉承幹の家は没落し、加えて社会の転変、戦争の勃発により蔵書は流散し始めた。劉承幹は商人としては成功せず、経営もよくなく経済難が拍車をかけ、蔵書を放出せざるを得なくなった。抗戦前（日中戦争前）に、この書樓の宝である宋刊『史記』『漢書』『後漢書』『三国史』、宋刊注の珍本『鶴山先生大全集』『寶氏連珠集』『永樂大典』残本、『宋会要』稿本、『明実録』抄本などは皆その所有者を変えることになった。ただし大部分の古籍の流失は、抗戦爆発後のことである。1937年「八・一三」上海事変で、戦火は南潯に及んだ。11月、日本軍は南潯を占領した。嘉業蔵書樓は日本軍の駐屯所となった。後日傀儡軍も又何度も書樓を騷擾した。盗匪も横行し、数度に互って書樓に入り窃盗した。



現存の蔵書

また前掲徐運著「南潯浩劫写真」に「特写：屋宇的焚毀」として次の記述がある。

最初の火の手が上がった建築物は南潯中学である。次には嘉業堂劉氏の蔵書樓であつた。“彼ら”は嘉業堂蔵書樓に来ると、先ず正庁の上に掛かつていた一幅の劉氏祖先の像を引き下ろし、更に宋元明版の珍藏書を箱詰めにし持ち出した。嘉業堂蔵書は宋元明版の珍本以外にも、地方志の部数において全国地方志蔵書の第三位を占めていた。ここにおいて“人々”は長年嘉業堂を垂涎の眼差して眺めていた。私は“彼ら”が平望から南潯に至ったその早さに疑問を感じずにはおれない。24時間も経たないうちに蔵書を取るために占領を行つたのである。ここにその準備の周到なることを読み取ることができる。なぜなら平望から南潯に至るのが余りにも早かつたからである。嘉業堂の珍藏は、それまでに一本も運び出されていなかった。考えるに、“人々”は行軍時に文化を獲得することを予定しており、一方我々の守備軍は土地を守ること以外は、彼らの守っている土地に一大の珍本古書があるとは思ひもしなかつたのである。

ここに大火が小さな鎮に燃え上がった。



日本軍の臨時司令部となった南潯の耶蘇堂

日本軍の臨時司令官部は、その夜耶蘇堂から西柵の顧氏宅に移った。この家の建築は非常に豪華で美しかった。“彼ら”はこの古式の家に二晩留まった。

司令部は又数百万の価値のある古画をもつ龐氏宅に移った。龐宅の部屋が焼けなかった原因は、先に龐氏ために古画を斡旋した骨董屋が“親日家”であつたからである。その他の家は焼却され、その火は十余日燃え続けた。各々の小さな鎮は全て一片の焦土と化した。焦土作戦は完全に実行さ

れたのである。

本文の作者の家も難を蒙った。私のところには珍貴な物は無かったが、祖先から受け継いだ綫装の古書があり、よい物も多くあった。“子孫これを保存せよ”との祖先の遺墨を蔵した木箱があり、又私自身の洋装書やベートーベンの田園合唱交響曲、月光の曲といったレコードや楽譜なども…

この一文において徐遲の指摘する「彼ら」は明らかに日本軍人を指しているし、また「人々」は日本軍隊に編入され同行している専門家、研究者出身の軍人（特務）を意味しているようである。以上紹介した二つの記述を見る限り、嘉業堂蔵書楼に対する略奪が行われたことは明白である。劉承幹の「自述」は訂正されねばならない。

VI. 浙江省の個人蔵書の略奪と破壊

浙江省には劉承幹の嘉業堂蔵書のみならず個人の収集による蔵書が多い。楽敏教授は第二章「日軍対図書の損毀」で「1. 公共図書館」「2. 学校図書館」に続けて「3. 私人蔵書」の項目を立て、次のように述べている。

私家の蔵書は浙江の図書中にあつて特別に突出している。浙江の私家による蔵書事業の起源は早く、名家が多く、規模は大きく、蔵書は立派で称賛に値する。その蔵書の珍貴なことは、国立図書館の蔵書をして相い比べることはできない程で、多くの珍藏のものが今に至つても尚多くの図書館の書庫の宝となっている。例えば杭州の丁氏八千卷楼の全部の蔵書は、現に南京図書館の古籍蔵書中の珍本となっている。湖洲の陸氏□宋楼から日本に流入した大量の宋元珍本は、日本静嘉堂文庫をして域外の雄たらしめている。

浙江には代々蔵書を有する伝統があり、且つ又その質量と数量は全国の首にあたることから、日本の文化関係の特務は此れらについて詳細に把握しており、これらの地方を占領した後、日本軍は彼らの指揮によって大規模な略奪を縦に行つた。杭州の大蔵書家王綏珊の東南蔵書楼はその一例である。

東南蔵書楼の収蔵する図書の価値は百万と称され、その名は浙江に知れ渡つていた。1935年王綏珊は人に託して北平において宋元明版の書籍と各種地方志を搜集させ3000余種を得た。「その選択の精なることは全国の最たるもので、40種近くは元版の孤本と明の抄本で、十分に珍貴に足るものである」。杭州が占領された後、東南蔵書楼は日本軍の強奪に遭遇した。抗日戦争中に破壊を受けたもつとも有名な蔵書楼は花近楼である。これは金濤が祖先から伝えられた蔵書を基礎に作ったもので、蔵書数は10万余巻で、1937年11月、長興占領時に破壊された。この他にも多くの名の伝わっていない普通蔵書の収蔵が日本軍の戦火により犠牲となつており、その数量は計り難い。僅かに檔案資料によって判明する。

以上の論述に続けて、楽敏教授は「浙江省檔案館檔案に散見」する資料によって、1942年5月26日「日軍進攻」原因により、江山県中医師公会の医薬図書50部が破棄された例など8例を表に掲げている。また「私人蔵書」の結びとして、研究者でもある蔵書家が心血を注いで収集した蔵書が一朝にして破壊された例として、中国現代小説家郁達夫の杭州にあった風雨茅廬の

蔵書が、日本軍によって全部破壊されたことと、郁達夫がそのことを1939年5月11日付『星中日報』に告発した一文「図書の惨劫」を引用している。

また嚴紹璽氏は前掲著において、浙江省から日本によって略奪された文献文物の内容として「書籍＝公家39,4031冊・私人31,213冊，字画＝公家160幅，私人1,480幅，碑帖＝公家163件・私人463件，古物＝公家340件・私人1,193件，標本＝公家201件・私人5,000件」の数字を挙げ、「私人」の図書、文物への略奪が相当数に上ることが判明する。¹⁸⁾また6例の個人蔵書に対する略奪と江蘇省図書館と浙江省嘉興市図書館の略奪を明らかにし、これらの略奪は「日本軍兵士の単純な軍事行為ではない。中国の広大な土地に百万の侵略軍が展開しており、彼らが皆漢籍目録学や版本学などに専門の知識を持ち、しかも宋版，元版，稿本，鈔本を識別できるとは考えにくい。図書館は軍事目標ではなく，所蔵の図書文物は軍事的価値も持たない。どうして日本軍は中国の都市を占領すると，その都市の図書館の中から最も重要な典籍文物を獲得することができたのか。前にも述べたように，これには疑いもなく日本中国学界の学者たちが中国の文献典籍の“掃滅戦争”に参加し策画したことによる」と，略奪の陰に研究者の関与を指摘する。¹⁹⁾

また前掲農偉雄等論文においても次のように指摘する。

中国の私人の蔵書家は，多くは代々の蔵書大家であり，且つ江浙一带に多く分布している。彼らの所蔵する図書の珍貴さは，国立図書館のものを全て集めても比較にならない程である。

これに対して日本の文化特務は掌を指すように，これらの地方を占領した後，日本軍による略奪を縦にさせた。南京の蔵書家盧冀野書楼は1万余冊を蔵し，且つ珍善本が多い。南京占領後，全部の蔵書が日本人によって略奪された。その他同市大石坝街50号の医師筱軒蔵書楼も日本軍の略奪に遇い，珍善本図書4箱，字画古玩2000余件が略奪された。杭州の大蔵書家王綏珊の東南蔵書楼に収蔵する図書の値打ちは百万あり，江浙に知れ渡っていた。（中略）杭州陥落後，東南蔵書楼も日本軍の略奪に遭遇した。1938年9月，常熟瞿氏の鉄琴銅劍楼は日本軍の略奪に遭い，珍善本図書1000余種，3000余種を奪われた。1939年10月，蘇州潘氏の滂喜齋所蔵の元代刻本3000余種，5000余冊が日本軍の略奪に遭い，書楼は放火され焼かれた。浙江平湖地区は，我が国私家蔵書の中心区であり，一家の蔵書の価値はどれも十百万であるが，日本軍の占領後，図書は全て彼らによって運び去られた。蘇常一带の蔵書の損失は計算できない。上海に避難してきた人の話によると，“途中帆船が絶えず，その満載しているものは文化的典籍である。日本軍は船頭に立って，中国が賠償に応じないから，物資でそれを補うと言っている”と言うことである。²⁰⁾

北京抗日戦争史学会・中国人民抗日戦争記念館編『日本軍侵華暴行実録』²¹⁾（三）は浙江における日本軍の暴行を記した中に「日軍鉄蹄下の平湖」²²⁾の一文があり，次のように記す。

我が県には科学に合格した家が非常に多い。例えば葛嗣威は珍藏の古籍を有し，方志の書は国内でも評判が高い。その他古玩書画の類也多かったが，均しく窃盜者が悉く何度も略奪を繰り返し，其の後で火を放って証拠を隠滅した。1932年“一・八”上海事変が勃発した時にも，葛氏が上海の寓居に所蔵していた古器書画は全て灰燼に帰した。ここに至って全ての物が失われた。これは中国の古籍の一大破壊であり，知る者はこれを痛惜して止まない。

以上、浙江省における個人蔵書に対する日本の略奪破壊の状況を一瞥した。これらの事実は先行研究に依拠して取り敢えず確認できたものであり、浙江省全域で行われた略奪破壊からすればほんの氷山の一角に過ぎない。今後とも更に事実の追求が必要である。

おわりに

この度の報告は浙江省における文化侵略のうち、個人蔵書に対する略奪と破壊を中心として、特にこれまで明らかになっていなかった南潯の嘉業堂蔵書楼を取り上げて述べた。公私図書館に対する日本の略奪は組織的に行われたものであり、1937年12月「満鉄」上海事務所、上海自然科学研究所、東亜同文書院による「中支占領区図書文献委員会」の設置、1938年8月25日陸軍省、海軍省、外務省による「中支文化関係処理委員会」設置会議の開催、同年9月の同「委員会」の設置、更には同「委員会」の下に「中支図書標本整理事務所」の設置、1939年3月興亜院に華中連絡部の設置、「中支文化関係処理委員会」を「中支建設資料整備委員会」に改称したことなどは、それを証拠付けるものである。これらの機関の果たした役割や行った事実については、今後とも追求して行きたい。またこれらの機関において研究者の果たした責任についても取り上げて行きたい。

註

- 1) 浙江省図書館志編纂委員会編 中国書籍出版 1994
- 2) 浙江省政協文史資料委員会編 浙江人民出版社 1995
- 3) 農偉雄・関健文「日本侵華戦争对中国図書館事業的破壊」『抗日戦争研究』1994 第3期 pp.98
- 4) 王聿均「戦時日軍对中国文化的破壊」台湾 中央研究院近代史研究所編『中央研究院近代史研究所集刊』第14期 pp.335
- 5) 『武漢市志・軍事志』武漢地方志編纂委員会主編 武漢大学出版社 1999年6月 pp.444
- 6) 『近代武漢城市史』中国社会科学出版社 1993年12月 pp.529
- 7) 前掲楽敏論文 pp.12
- 8) 大分市アートプラザで開催。同時にシンポジウム「戦争遺跡ちゃんにか!？」を実施。
- 9) 江蘇古籍出版社 1992年6月。第五章の内容は、第一節 日本軍隊対南京的“文献掃蕩”，第二節 中国各地漢籍被劫举例，第三節 全国文献，古文物被劫概述，第四節 对軍国主義的抵制与尋求中日文化關係的新的出發点，である。
- 10) 前掲楽敏論文「前言」の注に次の先行研究を挙げている。
 嚴紹璽『日本中国学史』（江西人民出版社 1993年）
 農偉雄・関健文「日本侵略戦争对中国図書事業的破壊」（『抗日戦争研究』1994年 第3期）
 王聿均「戦時日軍对中国文化的破壊」（台湾『近代史研究集刊』第14期 1985年）
 趙建民「抗戦期間日本对中国文化財産的破壊和掠奪」（『檔案与史学』1997年 第2期）
 孟国祥「日本对我國文物等財産的劫掠及び戦後の査証追索」（アメリカ『華夏之声』第12期 1997年2月）
 松本剛『略奪した文化－戦争と図書－』（岩波書店 1993年）
 岡村敬二『遺された蔵書－満鉄図書館・海外日本図書館の歴史－』（阿吽社 1994年）

このうち、農偉雄・関健文の論文の構成は「一、日軍炮火下中国図書館の災難 二、中国図書館西遷途中の損失 三、日軍対淪陷区図書館占領と破壊 四、日軍对中国善本書刊の掠奪 五、关于中国图书馆损失情况的統計」、王聿均論文の構成は「一、前言 二、商務印書館の破佛燬与正中書局的損失 三、对各級学校的摧残 四、中央研究院的损失 五、文物之劫掠与知識分子之被残害 六、結論」である。

- 11) 中央研究院近代史研究所集刊 第14号 1985年 pp.327-347
- 12) 俗名張王廟橋。張王とは張士誠のことで、彼は元末の農民反乱の領袖で、広惠宮を占領して行宮とした。南潯の人はこれを張王廟と称した。
- 13) 復旦大学出版社 1999年7月
- 14) 作者：徐遲，原載『名城要塞陷落記』広州 新生書局 1938年
- 15) 作者：謝国琦，原載『淪陷区域的非人生活』広州 新生書局 1938年
- 16) 繆荃係 吳昌綬董康撰 吳格整理點校 復旦大学出版社 1997年12月
- 17) 文物出版社 出版年無し。
- 18) 嚴紹璽前掲書 第五章 第三節「全国文献，古文物被劫概術」pp.201-202
- 19) 嚴紹璽前掲書 第五章 第二節「中国各地漢籍被劫举例」pp.198-200
- 20) 前掲農偉雄等論文 pp.97
- 21) 北京出版社 1997年6月
- 22) 『日軍侵華暴行実録』（三）pp. 455。この一文は『平湖文史資料』第1輯（pp.38）からの転載である。

The Cultural Aggression in The War between Japan and China

Teruo KANBE